

## R.D.レイン家族研究における、認識方法をめぐる理論的転調

——“comprehension”から“intellection”へ——

藤本 美貴（立命館大学大学院・博士課程）

統合失調症患者および当人を取り巻く家族状況の分析について、イギリスの精神医学者・R.D.レインの研究履歴を緻密に追っていくと、その認識方法に関する「理論的転調」とも呼ぶべき一つの転換期が早期において存在していたことに気付く。それは、代表作『ひき裂かれた自己』(Laing, 1960)から、『狂気と家族』(Laing & Esterson, 1964)を中心とする一連の緻密な家族研究へと移行する際に密かに試みられた、“comprehension”から“intellection”という概念への転調である。『弁証法的理性批判』を中心とする後期サルトルからの影響が背後にあることは明らかであるが、サルトルからの摂取によるこうした転調の中に、レインの独自性をいかに見出すべきだろうか。

人間と歴史をめぐる全体化的真理を可能にする哲学的土台(=弁証法的理性)の形成を目指したサルトルにおいて、“comprehension”は、創造的原点たる「(個別的)実践」そのもののなかでの弁証法の透過性について把握する営みを指し、同時にその実践を突き動かす「意図」の存在を前提とする。一方“intellection”は、個々の実践を歴史のなかで全体化していくより大きな弁証法の運動を把握する営みを指す。全体化的真理を標榜する弁証法的理性にあっては、実践そのもののみならず、実践が疎外される姿をも把握されなければならない。よってこうした二つの認識概念が設定されるのであって、“前者こそ後者の基礎であるが、しかし後者は前者を超える”といった関係性を両者は取り結ぶのである。

本報告での問題は次の点にある。サルトルにおいては基礎概念として内包されたままである“comprehension”が、レインにおいては、“intellection”という概念への急激な転調もあって、重大な変更を余儀なくされたのではないかという点だ。一言で言うと、「実践」とその「意図」との断絶である。レインにおいて、全体の家族状況に対する“intellection”的認識方法の中には、ある特定の行為者に対する「実践」への到達は目的として含まれつつも、「意図」への到達までは含まれない構造となっているのだ。

このような変更・断絶は、『狂気と家族』以降に本格化する一連の政治学的思想のための理論的土台として、不可欠なものであったと報告者は考える。つまり、表面上はサルトルの全体化論・弁証法的理性概念がそのまま応用可能であることを示すことで、それまで不可知とされてきた統合失調症の可知性を大いに訴えつつ、根底では「実践」と「意図」との断絶を密かに示すことで、正気とされる人間・社会でさえ避けることのできない“根源的な”疎外状況(ちなみにサルトルにおいて疎外は、全体化論を可能とさせる必要条件的性質をも担っているため、レインとは意味づけのされ方が異なる)を指摘するという、両面作戦である。